

莨菪

ナス科植物の不思議

東京薬科大学 客員教授／千葉大学 名誉教授

山崎 幹夫

Mikio Yamazaki

近は植物の図鑑、啓蒙書、一般的な読み物などが多く出版されるようになって、有毒植物による食中毒事故は著しく減少した。知識の普及もされることながら、自然の中で過ごす生活の機会が少なくなったのもその原因のひとつかと考えると、いささか寂しい気がしないでもない。

一方で、“健康ブーム”に便乗した「痩せ薬」や、糖尿病、高血圧、前立腺肥大などを改善すると称する怪しげな“健康食品”が巷に横行し、被害を広げているのを見ると、寂しいを通り越して腹立たしい気持ちにもなってくる。中国で作られたものだから漢方薬だろうという思い込みと、漢方薬だから副作用がないんだろうという誤解が重なって、実はアメリカのFDAが何年も前に承認を取り消していたいわくつきの合成抗肥満薬が配合された「痩身茶」によって、4人の死亡例を出した事件の発生はまだ記憶に新しい。

漢方薬の中にも附子、治葛、麻黄、莨菪など、作用の強いアルカロイドを含有する有毒植物を起原とするものがある。なかで、莨菪はユーラシア原産のナス科植物であるヒヨス *Hyoscyamus niger L.* を起原植物とし、『神農本草經』に「久しく

服すれば身体を軽くし、奔馬に及ぶ健脚になり、志強く、力を増し、神に通じ、鬼を見せしめ、多くを食すれば狂奔せしめる」とあるように、心を酔わせる作用の存在が古くから知られていたことがわかる。

李 時珍(1518-93)は、茛菪が意識を狂わせ、視聴の感覚を混乱させる働きをもつことについて、著書である『本草綱目』の中で「唐の安禄山は奚契丹を誘い出して茛菪酒を飲ませ、酔わせて穿穴に陥れたと伝えられる」と書いている。また、「嘉靖43年(1564)の2月、陝西の遊行僧武如香なる者が妖術を使って遊行していたが、昌黎県へ来たとき、たまたま張柱なる者の家でその妻の美人であるのを見かけ、饗応にこと寄せて一家を招き、紅色の散葉を入れた飯を一同に食させた。すると家族はしばらくしてことごとく昏迷し、妻は思うまま凌辱されてしまった。さらに散葉を耳に吹き込まれた張柱は発狂し、家族のいずれもが悪鬼のように見えて殺害してしまった。張柱は10日あまり官憲に拘禁された後に2碗ほどの痰を吐いて正気に戻ったが、家族殺害の罪により武如香とともに死刑に処せられたという。その妖薬なるものは茛菪の類であったらしい。この毒を解する方法は心得ておくべきことだ」という話題を、李時珍はもうひとつの茛菪の作用をめぐるエピソードとして記述している。

ナ 斯科には、私たちの日常の生活においても、茄子、馬鈴薯、唐辛子、ピーマン、トマト、煙草、酸漿など、馴染みの深い植物が多い。枸杞は滋養強壮に効果をもつとされる漢方薬として、昨今は「薬膳」に利用され、食卓に見かける機会も多い。これだけ生活に役立ち、馴染みの深いナス科植物の中に茛菪のように私たちの心を動かす働きをもつ植物が存在するのは不思議のような気がするが、実は、ナス科には、茛菪のヒヨスのほかにもマンドレーク、ベラドンナ、ハシリドコロ、チョウセンアサガオなど、茛菪と同じ作用をもつ植物が多いほど多く存在している。同じ作用を示すのは、いずれもトロパンアルカロイドとして知られるヒヨスチアミン(アトロピン)やスコポラミンなどの成分を含有するためである。

な かで、ハシリドコロはわが国の山野に広く自生しており、その名の由来も「服すれば止まるところを知らずに狂走する」という働きと、根茎の様子がヤマノイモ科のトコロに似ていることによるところでは、茛菪が中国からもたらされたとき、わが国の学者はその原植物がわが国に自生しないヒヨスであることに気付かず、ハシリドコロであるとした。以来、わが国ではハシリドコロの根をロート根、葉をロート葉とし、『日本薬局方』にもその名が記載されたという。

文 政6年(1823)に長崎出島に駐在するオランダ人医師になりすまして来日したドイツ人医師シーボルトが、江戸参府の際に宿舎を訪れた將軍御典医土生玄碩にベラドンナを使った瞳孔散大の術技を見せ、驚く玄碩に、この生薬は江戸への旅の途中、木曾川を渡った宮という場所で見たと告げた。実は、彼が宮で目撃した植物はオランダから持参したベラドンナではなく、自生のハシリドコロを見誤ったのであったが、喜び勇んだ玄碩は早速宮からその植物を取り寄せ、以後、瞳孔散大下に行われた彼の紅彩切開手術は格段の進歩を遂げたと伝えられる。礼として彼がシーボルトに贈った將軍拝領の紋服のことが、その後に起きたいわゆる「シーボルト事件」に関連して発覚し、玄碩が家禄屋敷を没収され、閉門となって死没したことはよく知られるとおりである。

チ ョウセンアサガオが曼陀羅華として花岡青洲の「通仙散」に配合され、世界で初めての全身麻酔下での乳がん摘出手術の成功に役立った物語は有吉佐和子『花岡青洲の妻』によても有名になったが、誤解されるのは、曼陀羅華は漢方薬ではなく、蘭方医によって使われたオランダ生薬だということである。青洲はこれを烏頭、白芷、当帰、川芎などと配合して「通仙散」をつくった。チョウセンアサガオの原産地は熱帯アジアとされ、わが国には江戸期に伝えられた。神奈川県に住む家族が、自宅で栽培した植物をツルムラサキと勘違いしておひたしにして食べ、中毒をしたという新聞記事をみたのは、2年ほど前のことだったような気がする。